

現 在2階ギャラリーでは「映し
てみよう!! フィルムチケット
展」を行っています。2013年企
画展示「ジブリの森のレンズ展」で
展示したチケットプロジェクターを、
今回久しぶりに設置しました。受付
でお渡ししている映画館の入場券に
は、スタジオジブリ長編アニメーシ
ョンの映画フィルムが使われています。
この入場券をチケットプロジェ
クターに差し込むと、フィルムが小
さなスクリーンに映し出されます。

プロジェクターを通して鮮やかに
映し出された絵を見て「あのシー
ンか!」と気づかれることも多いです。
また、入場券を正しく差し込んだ
つもりなのに、絵が上下さかさまに
映り「あれ?」と不思議そうに何度
も入場券を出し入れする子ども
たちの姿もよく見かけます。これは、
上下を逆に映し出すレンズの特性
によるものです。小さなフィルム
が大きくなって映ることで、映
画の原理を体験できるチケット
プロジェクター。ぜひお試しください
と思います。



季刊トライホークス 2024年 | 76号

発行日……2024年9月3日 | 発行人……中島清文

発行所……徳間記念アニメーション文化財団

東京都三鷹市下連雀1-1-83 三鷹の森ジブリ美術館

編集……石光紀子 塚原瑞穂 | デザイン……川島弘世

印刷……TOPPANクロレ株式会社 | 非売品

本棚より

トライホークスに置いているおすすめの本を紹介しています。
トライホークスの本棚の一冊から、みなさんの本棚の一冊にいただけたら嬉しいです。

二分間の冒険

この物語の主人公は小学6年生の悟です。保健室に行く途中、悟は一匹の黒猫に出会います。人の言葉を話す不思議な黒猫「ダレカ」は、足にささったとげを取ってくれたお礼にひとつだけ願いを叶えてくれるといいます。願いを考える時間をもらおうと何気なく口にした「時間をおくれ」。このひと言で、悟は全く別の世界へ飛ばされてしまうのです。しかも、その世界でダレカを見つけないければ元の世界に戻れないという約束つきで、もはやこれがお礼なかも怪しい感じです。

悟がやって来たのは子どもだけの世界でした。そこでは2カ月に1度、竜退治のために子どもたちが集められます。ダレカを探すミッションに加え、竜の館へ行くことになった悟。なぜ大人がいないのか、この世界がどう作られているのかは、竜に挑む過程で明かされていきます。

この大冒険の間、元の世界の時間はたった2分間です。戻ってきても浦島太郎になることはありません。「日常の隙間のような時間に、別の世界へ行き、冒険をして帰ってくる」なんて、とても羨ましいと思いますが、みなさんはどうでしょうか。私は小学生の時にこの『二分間の冒険』を読んで、黒猫に出会うと「ダレカ」かもしれない、2分間の冒険に出かけた子がこの学校にもいるかもしれない、とずっと考えていました。全く別の世界でダレカを見つけること、友だちと一緒に竜をたおすこと、悟の冒険と一緒に体験するとともに、自分の周りにも不思議があるに違いない、そう思わせる物語です。



二分間の冒険

作…岡田 淳

偕成社文庫 880円

木村有子

Yuko Kimura

夢中になって読んだ本

チェコ語翻訳家の木村有子さんに本を紹介していただきました。その中でもヨゼフ・ラダは、図書館でもおなじみの作家です。昨年秋に出版された『きつねがはしる』は、木村さん自身がチェコのわらべうた絵本2冊から38編を選び、訳された本です。ラダのやさしい絵と言葉を、ぜひ味わっていただきたいと思います。



* * * * *

夢 中になって読んだ本、と聞いてまっさきに頭に浮かぶのは『長くつ下のピッピ』と『黒ねこミケシュのぼうけん』です。

どちらの本も、父の仕事の関係で、チェコスロバキア社会主義共和国に住んでいた小学校3年生から5年生までの間に何度となく読みました。海外赴任が長引くとみて、母が日本からチェコへ送った子どもの本は、リンドグレン作品集（岩波書店）と、ドリトル先生物語シリーズ（岩波書店）、田島征三さん絵の『ちからたろう』などのシリーズ「むかしむかし絵本」（ポプラ社）でした。

チェコ語が全くわからずに入った現地校では、遊びながらいつの間にか会話ができるようになり、ミーシャという元気で正義感の強い親友ができました。上級生に私がかかわれると、負けずに言い返してくれるミーシャは頼もしくてピッピみたい！ と思いました。大人が見ていない所で子どもが考える自由でゆかいな遊びにもあこがれました。ピッピの影響が両親が留守中に、お風呂に入りながら夕ご飯が食べたい！ とお手伝いのお姉さんに言って交渉したところ成立。お風呂につかりながら食べた時のわくわく感を覚えています。

チェコでは、この3つのシリーズの本をくり返し読み、それを不満だと思ったことはありません。リンドグレンの作品集は、その時読みたい気持ちに寄り沿ってくれる作品が必ずあったからです。同級生の男の子と、わが家の屋根裏を探検した

り秘密のアルファベットで手紙のやりとりをして夢中になった頃は『名探偵カッレくん』、クリスマスシーズンにクッキーをたくさん焼いたり自然の中で思い切り遊んでいた頃は、チェコモヤカまし村と同じだなあ、と『やかまし村の子どもたち』を身近に感じ嬉しく思ったものです。

そんなある日、母におつかいを頼まれました。家から歩いて10分も離れていない所に住む日本人のお宅へ届けるものがありました。9歳の私が4歳の妹の手を引き、ドキドキしながら訪ねました。玄関で手渡したらすぐ帰るはずが「どうぞ上って！」と半ば強引に言われて、ラーメンまでご馳走になってしまい、早く帰らないとお母さんが……とあせる私に「はい、私がホンヤクした本なの。どうぞ」と本を1冊手渡されました。それが『黒ねこミケシュのぼうけん』でした。チェコに長年暮らしていらした翻訳家、小野田澄子さんのお宅へのおつかいだったのです。

当時の私は、チェコの暮らしにも慣れた頃で、ヨゼフ・ラダの絵が大好きでした。ラダの動物がとてかわいいので、見た者は誰でもにんまりしてしまいます。それが、日本語でラダの『黒ねこミケシュのぼうけん』が読めるなんて！ と、家に帰るとさっそく、おしゃべりするねこ、ミケシュの話を読みました。ミケシュが人間の言葉を話すという設定に心が動きました。本の中のナシノキ村の人たちも、ミケシュが話すと最初は

びっくりしますが、家族の一員になっていくのが読んでいて楽しく、ミケシュが本当にいたらいいなあ、と思いました。ラダ作の『きつねものがたり』の本も、いつの間にやらチェコにあった私の本棚に加わり、愛読書になりました。チェコに住みながら、その国の代表的な児童文学を、理想的な年齢の時に日本語で読めた事は、私にとってこれ以上ない贈り物になり、のちに翻訳家という道を選ぶきっかけのひとつになったかもしれません。

翻訳家になり、50代で夢中になって読んだのはヨゼフ・チャペックの『こいぬとこねこのおかしな話』です。こいぬとこねこがなんでも人間と同じことをしなくて、汚れていた家の床を自分達の毛で洗ったり、子どもたちに間違いだらけの手紙を書いたり、おいしいケーキを焼こうと好物のチーズもねずみも全て入れてしまいます。失敗が笑いを誘います。子どもの頃に出会ったのは大判のカラー挿絵の入った本です。アニメーションなどでストーリーは知っていたものの、新訳の依頼を受けチェコ語の原書を読み始めると、ふつふつと笑いがこみあげてきました。少しませたこねこと、とぼけたこいぬの丁々発止のやりとりは、チェコらしいユーモアや言葉のキャッチボールにあふれています。カレル・チャペックの兄で画家のヨゼフ・チャペック作のこの本は、チェコで最も読まれている児童文学だと、チェコの誰もが口を揃えて言います。

半世紀前、チェコスロバキアで現地校に入り、温かいチェコの人たちに囲まれながらのびのびと過ごした子ども時代。その後、ベルリンの壁崩壊

やビロード革命など大きな歴史のうねりに遭遇したことをエッセイ集『チェコのヤポンカ 私が子どもの本の翻訳家になるまで』にまとめました。「ヤポンカ」は、チェコ語で日本人の女性という意味です。鮮明に覚えているチェコスロバキア時代の出来事や、もう会えないチェコの人達のことは、スケッチするように再現できればという思いで綴りました。少女だったヤポンカも私の手を離れ、どうやらひとりで歩みだしたようです。



カレル橋とプラハ城をバックに木村さんと母親の景子さん。チェコは第2の故郷

きむら ゆうこ

1962年、東京生まれ。チェコ語翻訳家。1970年代にプラハの小学校に通う。日本大学芸術学部卒業後、80年代半ばにプラハ・カレル大学へ留学。新聞社勤務後、ドイツでスラブ語圏の言語を学ぶ。絵本の翻訳に「もぐらくんの絵本」シリーズ、『どうぶつたちがねむるとき』（以上、偕成社）など、物語の翻訳に『こいぬとこねこのおかしな話』、『火の鳥ときつねのリシカ チェコの昔話』、わらべうたの翻訳に『きつねがはしる』（以上、岩波書店）、エッセイ集に『チェコのヤポンカ 私が子どもの本の翻訳家になるまで』（かもがわ出版）など。

トライホークスの本

クリスマスのあかり
チェコのイブのできごと
作…レンカ・ロジノフスカ
訳…木村有子 絵…出久根育
福音館書店 1,760円



長くつ下のピッピー
作…アストリッド・リンドグレン
訳…大塚勇三
岩波書店 1,870円



黒ねこミケシュのぼうげん
作…ヨゼフ・ラダ
訳…小野田澄子
岩波書店 品切重版未定

- ◆ **きつねものがたり**
作絵…ヨゼフ・ラダ 訳…うちだりさこ 福音館書店 1,650円
- ◆ **こいぬとこねこのおかしな話**
作…ヨゼフ・チャペック 訳…木村有子 岩波少年文庫 748円
- ◆ **長い長いお医者さんの話**
作…カレル・チャペック 訳…中野好夫 岩波少年文庫 902円
- ◆ **魔女のむすこたち**
作…カレル・ボラー・チェク 訳…小野田澄子 岩波少年文庫 792円
- ◆ **トムは真夜中の庭で**
作…フィリパ・ピアス 訳…高杉一郎 岩波書店 2,090円
- ◆ **どうぶつたちがねむるとき**
作…イジー・ドヴォジャーク 絵…マリエ・シュトゥンプフヴァー
訳…木村有子 偕成社 1,760円
- ◆ **きつねがはしる チェコのわらべうた**
絵…ヨゼフ・ラダ 編訳…木村有子 岩波書店 1,210円
- ◆ **チェコのヤポンカ わたしが子どもの本の翻訳家になるまで**
著…木村有子 かもがわ出版 1,870円
- ◆ **小川未明童話集*** 編…桑原三郎 岩波文庫 891円

*印の本は、木村さんが選んだタイトルをもとに編集が選びました。

本棚より

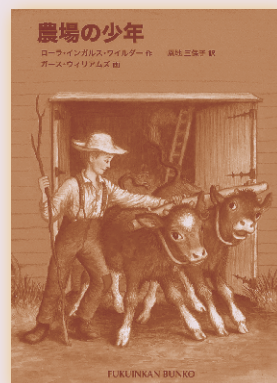
農場の少年

『大きな森の小さな家』から始まる「インガルス一家の物語」シリーズは、テレビドラマ「大草原の小さな家」でご存じの方も多いのではないでしょうか。西部開拓時代のアメリカで、主人公の少女ローラが家族と共に力を合わせて生きていく姿が描かれています。『農場の少年』の主人公は、後にローラの夫となる少年アルマンゾです。幼少期の彼の目を通して、広大な農場での子どもたちの日常が生き生きと語られています。

両親や兄姉と暮らすアルマンゾはもうすぐ9歳。家族が営む農場には季節ごとに様々な仕事があります。冬には牛や豚を殺して保存食を作り、春には種まきに追われ、暑い夏を超えた秋には冬に向けて食料を山ほど収穫します。めくるめく仕事の合間には、様々な行事についても語られています。地域の一大イベントである群博覧会に出掛けて、自分たちの自慢の農作物や手芸作品を出品したり、クリスマスには親戚が一堂に会し、子豚の丸焼きやパンプキン・パイなどのごちそうを山ほど食べ、親戚の子どもたちと雪合戦をして遊んだりするのです。描かれているのは彼らの暮らしの記録なのですが、細やかな描写に導かれて、読者はアルマンゾたちの生活を自分自身が経験しているかのように感じることができます。

ある冬の日、アルマンゾは父さんと一緒に丸太運びをすることになります。牛にソリをつけ、森から切り出した丸太を家まで運んでいくのですが、アルマンゾはなかなかうまく牛を誘導できません。無理に積んだ丸太が崩れて下敷きになってしまったり、ソリが倒れ牛と一緒に深い雪の中に埋もれてしまったりと、次々に困難が訪れます。父さんはアルマンゾが危険な目にあった時にはすぐに駆けつけてくれますが、手を貸すのは必要最低限です。アルマンゾが自分の力でソリを立て直せた時、父さんは「よくやった」と彼を褒め、「落ちたら落ちたで、あげさえすりゃいいんだ」と声をかけます。辛抱強く努力を続けるアルマンゾの姿や、厳しくも暖かく息子を見守る父さんの愛情が描かれており、読者もアルマンゾの成長を愛おしく思えてくるのです。

自然の中で自分たちの力で生きていく大変さや、その向こう側にある喜びが、この本の中にはたくさん詰まっています。アルマンゾたちのかけがえのない日々を自分も共有できた気分になる1冊です。



農場の少年

作…ローラ・インガルス・ワイルダー
画…ガース・ウィリアムズ
訳…恩地三保子
福音館文庫 825円

中国のお話より

月からきたトウヤーヤ



月からきたトウヤーヤ

作…蕭甘牛
訳…君島久子
岩波少年文庫 704円

とある山里にわらじづくりのおばあさんがたったひとりて住んでいました。あるとき、月の中から、長いひげをたらし、真っ白な羊の毛衣を着たおじいさんがおりてきました。手にはむちを持ち、二匹のウサギの上ののっています。おじいさんは月の中で羊を飼っているのですが、月の地面はどこも水晶でできていて、つるつるすべってしまうので、おばあさんに丈夫なわらじを作ってほしいと頼みに来たのでした。

わらじのお礼におばあさんがもらったのは、ウサギの口から取り出したひと粒の歯。小さな歯を地面に植えると、やがてトウモロコシの実を結び、トウモロコシは真っ白なまるまる太った赤ん坊となりました。赤ん坊は、ウサギの歯、トウヤーヤから生れたので「トウヤーヤ」と名づけられました。大きくなったトウヤーヤはいろいろな冒険をします。どんな病も治す、金色の羽を持つ鳥を探しに行ったり、その鳥が原因で王様のごきげんを損ねてしまったり……。そして、その困難を乗り越えるために「なぞなぞ」も解かねばなりませんでした。

月にまつわるお話は世界中にあります。今回紹介するのは中国のチワン族の民話を素材としたお話です。このお話では月の表面は水晶でしたが、地球のように海や湖があると考えられてもいました。夜空に輝く月はひとつだけですが、土地ごとに様々なことを想像し、お話が語られてきたのだと思います。